

「文学研究」によせて

前川, 俊一

<https://doi.org/10.15017/2553415>

出版情報 : 文学研究. 70, pp.1-3, 1973-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

「文学研究」によせて

前川俊一

私が「文学研究」に筆を執らせていただくのも、これが最後の機会と思います。本誌には二十四年にわたって随分世話と厄介をおかけして来ました。顧みて感慨なきを得ません。

昭和二十三年の春に九大に赴任して来てから間もない頃のことと思います。「九州文学会」のつどいに加わったとき、この会の手で「文学研究」という学術誌が年二回発行されているときかされました。そしてその創刊号から最近号までの一揃いを頂戴することになったのは有難かったです。早速その席で、次号に何か発表するよう御指示を受けたのには、正直なところ、あわててしまいました。当時の私の身辺の事情では、毎週の講義の準備をするのが精一杯のところ、とてもこのように立派な学術誌に載せられる論文など、ものする余裕も自信もなかったのです。

たまたま、その前年に京都大学で開催の日本英文学会大会で行なった口頭発表の草稿が手許に残っていましたので、それに幾分手を加えて、何とか責をふさぎました。その発表も、当時の勤務先の御偉方の再度にわたる内々の御指示を断りきれず、おそるおそるやらせていただいたのでした。不思議な御縁で、その京都の大会では、中山竹二郎先生がなさいましたチョーサーの「トロイルスとクリセイデ」についての御発表を大変興味深く拝聴

したことが思い出されます。その当時、自分が近い将来に先生の下で働く身になろうなどとは、勿論夢にも考え及びませんでした。

以来、毎年一、二回発行される「文学研究」誌への寄稿論文の作成には、いつもなけなしの脳漿を絞らされて来ました。毎回交替する責任編集者の方々は原稿の締切りについては割合ゆるやかでしたが（恐らく今でもそうかと存じ、この原稿もつい遅らせてしまい、申し訳ありません）、吉町先生と目加田先生は、両先生それぞれの行き方で、仲々手きびしく、私ごとき筆不精で遅筆の者は閉口させられました。しかし、考えて見ますと、もと私には、口頭発表にせよ、論文にせよ、盛りあがる研究欲と発表欲に駆られて、自発的に書き上げたものといったのは、恥かしながら、何一つありません。在学時代の「オペロン」誌以来、いつも編集者から尻をたたかれ、たたかれてここまで書きつづけて来た気がいたします（訳誌を載せていただくようになってからは、一寸事情がちがって来ましたが）。ですから、九大に奉職するようになりましても、「文学研究」に何か研究らしきものを発表せねば、といった一種の義務感——それとも、心理的圧迫感とでも申しましょるか——を負わせられていませんでしたら、私の研究業績として、一生に一体何が残ったろうか、と考えますと、「文学研究」誌の存在の有難さがつくづくと身に沁みます。この四月からは、そのような圧迫感からも解放され、晴れて自由の身（？）になりました。と申しましても、このまま「恍惚の人」となり終るまでのんびり暮らすには、まだちと早すぎる年齢のようにも感ぜられます。これからはわれとわが身に鞭打って、「まだ生きている」あかしになるものを、何かしら残したい、などと夢想している昨今の心境です。

「文学研究」に対する注文を書けとのことですが、今申しあげたようなわけで、私には注文などする気も、ま

たその資格もありません。只々有難いことだったと思い、そして現役の「文学研究」同人の方々の御丹精により、本誌が九大における文学研究誌としての役割を立派に果たし、すくすくと伸びて行きますよう、心からお祈りする次第です。どうも有難うございました。

(十一月三日 記す)